玉川教会たより

NO,453

1月19日

祈りの小径

▼『あなたが祈るときは、奥まった自分の部屋に入って戸を閉め、隠れたところにおられるあなたの父に祈りなさい…マタイ6：6』。

『祈りの小径』は、『信徒の友』誌に掲載された祈りを収録したものであり、最初から、公にされることを想定した祈りだ。しかし、小島誠志牧師の祈りは、本質的には密室の祈りだと思う。他人に聞かれること、他人に読まれることを全く想定していないかのように、飾らない言葉で紡がれる。

▼時に赤裸々なまでに、心の内がさらけだされ、時に、読むものがハラハラするほどに、強い口調で、神に向かい合う。理不尽と見える神の仕業に抵抗し、うめき、ふさぎ込み、そして、時に子どものように無邪気に喜び感謝し、涙する。

読者を高尚な信仰の境地に導くとか、秘められていた知恵を説くとかということは念頭にないらしい。

▼ヒゼキヤは、至聖所の、最も公式な祈りの場に、子どもが欲しいという個人的な祈りを携えていた。そこに天使が顕れる。ここでは、公と私がせめぎ合い、密室が開かれて天につながり、ヒゼキヤの耳と舌が閉ざされて、ヨハネの誕生の時まで、ヒゼキヤの声も思いも、閉じ込められる。密室の祈りこそが、神に向かって開かれた祈りだ。

▼密室の祈りだから、ただ、ひたすら神を見上げ、ただ、ひたすらに神に向けられた祈りだから、小島牧師の祈りの言葉が、多くの人々の心の奥底にあるうめきや、迷いや挫折に重なり、疑いまでもが共感を呼ぶのではないだろうか。密室の祈りこそが、同じ苦悩を持つ信仰の兄弟姉妹に向かって開かれた祈りだ。

▼ヨセフは、愛する者に裏切られたと思い、煩悶のうちに独り祈り、疲れ果てて眠り込んだ時に、夢に顕れた天使の御告げを聞いた。この祈りこそ、誰にも知らせることの出来ない密室の祈りだった。そして、この祈りこそが、福音のはじまりだ。

ヨセフの苦しい祈りの中で、嫉妬よりも、悔しさよりも、マリアを思う思いが勝った。優しさが勝った。だからヨセフは、人の心の隙間に入り込む魔に捉えられることなく、天使の声を聞いた。

小島牧師の祈りには、優しさがある。優しい言葉で優しい思いを綴ったものではなく、挫折や憎しみや、孤独を歌った祈りの中に、背景に、優しさがある。

▼詩人・金子光晴は、「本当に詩を書きたいと思ったら、良い詩を書いてはならない。間違っても、人を感動させる詩を書いてはならない」と言った。この言葉は、説教に、そして祈りに全く当て嵌まると、かねがね思っている。「本当に説教したいと思ったら、良い説教をしてはならない。間違っても、人を感動させる説教をしてはならない」。「本当に祈りたいと思ったら、良い祈りをしてはならない。間違っても、人を感動させる祈りをしてはならない」。

金子光晴には、読者を戸惑わせ、たじろがせ、打ちのめすような作品が少なくない。しかし、それ以上に、感動を覚えずにいられない「良い詩」が多い。これは、彼の失敗作なのだろうか。断じてそうではない。

▼同様に、小島牧師の祈りには、人の心の一番深いところで感動を呼ぶものがある。感動、心が揺り動かされ、震え、そして共鳴する。真実の叫びであり、真実のつぶやきであり、真実の訴えであり、真実の叫びであり、密室の祈りであり、そして神へ思いを向けさせ、開かせる祈りだ。

…これは書評です。マナの部屋の文庫で、貸し出しもしています。

194－0041　町田市玉川学園4の5の32　TEL. 042－732－9321